

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00030

研究課題名（和文）共通感覚の公共的機能の再解釈を基盤とした「テレパシー倫理学」の構築

研究課題名（英文）Constructing a "Telepathy Ethics" Based on a Reinterpretation of the Public Function of the Common Sense

研究代表者

宮崎 裕助（Miyazaki, Yusuke）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：40509444

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果の要点は、カント美学および共通感覚論研究の成果とその深化を基盤として「テレパシー倫理学」を切り拓いたところにある。「テレパシー倫理学」の構築のために、政治的判断力と歴史感覚、パンデミックにおける信への問いと、集団心理学と精神分析、共同体と他者感覚、友愛と敵対、想像力とフィクション、ポストモダンにおける来たるべき啓蒙といった複数の主題にそくして課題を推進することによって成果を出した。発表形態では、単著の刊行、学術誌や単行本への寄稿、国内外での学会発表、また商業誌やインターネットでの発信を通して、成果の公表を継続的に実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の共通感覚論を、近接性や同質性に基づくシンパシー（共感）やエンパシー（感情移入）の観点からではなく、遠隔性や異他性に基づくテレパシーの観点から刷新することにより、今日的課題に哲学・倫理的視点から応答しうるものである。本研究代表者は、かつてデリダの討議倫理学を「テレコミュニケーションの論理」として定式することを通じて新たな民主主義論の地平を解明していた。これは大衆の情動的同一化に帰結しない「距たりの共鳴」として人々の絆を構想し、「テレパシー倫理」に基づいた共同体のかたちを模索することに通じている。こうした目論見のもとに「テレパシー倫理学」の構築を行なった点にその学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The main point of the results of this research is that it has opened up a “telepathy ethics” on the basis of deepening of my study on Kantian aesthetics and the common sense theory. The results of the attempt to construct a “telepathy ethics” were achieved by promoting issues in accordance with several themes: political judgement and historical sense, the question of faith in the age of pandemics, group psychology and psychoanalysis, community and sense of otherness, friendship and hostility, imagination and fiction, and the coming Enlightenment in postmodernity. In terms of modes of publication, the results continued to be made accessible through single-authored publications, contributions to journals and monographs, presentations at national and international conferences, and communications in commercial journals and on the internet.

研究分野：哲学 倫理学 現代思想

キーワード：テレパシー 倫理 エンパシー 共通感覚

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

18世紀末カントは『判断力批判』において、共同体感覚としての共通感覚論を、美的判断力の涵養によって説明する可能性を切り開いていた。共通感覚(Gemeinsinn)に根ざした美的判断は、普遍的妥当性を要求するかぎり、市民同士がそれを共有するべく討議しうる公共的な場を切り開く。美への感受性は、市民の公共感覚の形成を促し、共同体の統合のための礎石となる。しかし共同体にとって文化と教養の基盤となるこうした統合原理をめぐって、20世紀の世界戦争の惨禍が示すのは、それが啓蒙と普遍性を導くというよりも、戦争の美学と国家主義の動因へと奉仕させられた(ナチスの「政治の審美化」)という現実にはかならない。本研究は、こうした共通感覚の負の側面にこそ、その核心を導く学問的問いの出発点を見出している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、共通感覚論の再解釈に基づき、「テレパシー」と呼ばれるべき概念によって現代倫理学の新機軸を打ち立てることである。共通感覚の概念には、アリストテレス以来、「五感に共通の感覚」と「他者との共通の感覚」という二つの系譜がある。特に後者は、人々の共同体感覚(同胞感情)として重要な公共的含意をもつ。しかしこの概念は従来シンパシー(共感)やエンパシー(感情移入)のような集団統合の感情原理として追究されてきたことで、人々の感情の衝突や集会的情動の暴走がもたらす現代の諸問題に十分に答えられていない。そこで本研究は、研究代表者がこれまで取り組んできたカント美学および共通感覚論研究の成果とその深化を基盤として「テレパシー倫理学」を切り拓くことを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、従来のデリダ論を中心とした研究成果に基づき、前述のように批判的に検討された共通感覚論から、本研究が主題とする「距たりのパトス」としてのテレパシー概念を引き出す。これにより、シンパシーを基軸とした従来型とは異なる共通感覚論の総合的解釈を打ち出す。そのさい、テレパシー概念に基づく共通感覚論を一つの倫理学へと構築すべく、集団的感情が惹起している現代の倫理・政治的課題(とくにテレコミュニケーションおよびテレテクノロジーを介したポピュリズムおよび衆愚政治の問題)に回答することを試みる。かくしてテレパシーの倫理学の構想が今日的な課題の要請のなかで具体化される。

4. 研究成果

(1) 2020年度の研究実績は、第一に、ハンナ・アーレントの共通感覚論が根ざしている歴史的判断力のモデルを解明した。アーレントが晩年に到達した歴史的判断力のモデルは、カントの『判断力批判』に遡る反省的判断力という共通点において、政治的判断力と同じ構造をもっている。まず両者が異なっているのは、判断の時間的な様相である。政治的判断は、みずからの行動の意味を事前に未来にむけて投げかけるのに対して、歴史的判断は、過ぎ去った出来事の意味を事後に振り返ってもたらずという点である。しかし時間的な様相のベクトルは対称的であるものの、両者は、カントが特徴づけていたように、一回的な出来事の意味を普遍性にむけて与える仕方であるという点で、反省的判断力に根ざしているのである(論文「判断 政治的なものと歴史的なものとの交叉」)。

第二に、ジャック・デリダの宗教論が現在のコロナ危機においていかなる「信」の経験を示しているかの問いを追究した。現在のコロナ危機は「コロナ・ピューリタニズム」(斎藤環の命名による)の様相を呈していることがわかる。いまや人々はピューリタンのような厳格で禁欲的な行動様式を強いられる。これは、晩年のデリダが「世界ラテン化」として分析した世俗化以後の「宗教的なものの回帰」として解釈しなおすことができる。デリダはこれがIT技術の遠隔通信テクノロジーと協働することで増幅するであろうという点も指摘していた。しかしそこからデリダがハイデガーの解釈を通じて示唆していたのは、聖性なしの他者への信を追求する可能性であった。これは本研究のいう「テレパシー倫理学」の基礎を与えうる視点にはかならない(論文「グローバル・パンデミックにおける信と知 デリダの自己免疫論とコロナ・ピューリタニズ

ム」)。

(2) 2021年度の研究実績は、第一に、フロイトの集団心理学の問いを追究した。まず、政治哲学者エルネスト・ラクハウのポピュリズム論に注目し、指導者を伴わないような多様な集団形成の積極的な可能性をフロイト自身のテキストに読み込み、この可能性をいかに捉え直してゆくかと問うた。次に、フランスの哲学者フィリップ・ラクー=ラバルトとジャン=リュック・ナンシーの「政治的パニック」論を取り上げ、同一化による集団形成が解体するパニック的瞬間を介して、この同一化が脱同一化のプロセスに通じていかざるをえないことを検討した。彼らの問題提起は、そうした解体的契機が集団形成の本質に組み込まれていることを明らかにしたうえで、そこから出発していかに新たな集団形成へとつなげていくチャンスを見出すかについての問いかけとみなすことができる。(論文「情動の退隱 フロイトと現代ポピュリズムの問い」)

第二に、イタリアの思想家ジョルジョ・アガンベンとフランスの哲学者ジャック・デリダとの共感論の対比を通じてテレパシー論を肉づけた。アガンベンが自己と他者の分割そのものを共有する共通感覚のうちに友愛を見いだす場合に、分有された感覚の同時的な時間性が前提とされているのに対して、デリダは、言語という媒体を不可欠なものとする中で、現前しない他者、他者の不在すらも他者性の契機とするのであり、さらには、自他関係を断ち切るような他者の不在をこそ友愛の可能性の条件とするのである。デリダの友愛は、隔時性ないし錯時性によって働く共感である。こうした遠隔(テレ)コミュニケーションを介したデリダの共感論は、エンパシーではなくテレパシー論として考えることができる。(学会発表「来たるべき共感の共同体 シンパシー、エンパシー、テレパシー」)

(3) 2022年度の研究実績は、第一に、フランスの哲学者ジャック・デリダのフロイト論を介してテレパシー的な共同体論の可能性を考察した。ここでいうテレパシーは、現代のコミュニケーション・メディアの発達によって新たなコミュニティの実現を推進するどころか、ますます不可能にする。これはむしろ、共同体の紐帯となるはずの共感が、言語やその他さまざまな媒体(メディア)の介在によってあらかじめ歪められ寸断されており、いかに共同体が閉じないか、共同性として閉じることができないかを探究するものだろう。これはたんなる悲観論ではない。コミュニティの達成それ自体を不可能にするこうした言語的媒体は、透明化したり取り除いたりすることが望ましいような夾雑物や異物としてあるわけではない。そうではなく、そうした「異物」を通してこそ、私たちのコミュニケーションは、コミュニティ(共同体)を、積極的に閉じないようにすることができる。これはつまり、当のコミュニティに既存の仕方ではない未来を残しておくための必要なチャンスとして、そうした媒体がつねに必要であり続けるのだということである。(論文「共感の共同体論再考」『精神分析のゆくえ』所収)

第二に、こうしたテレパシー論の背景をなす思想が歴史的にみて、啓蒙の概念との関係でどのような射程をもつのかを検討した。とりわけ二人のドイツの哲学者マックス・ホルクハイマーとテオドル・アドルノの『啓蒙の弁証法』の洞察が、20世紀のフランス思想(とりわけミシェル・フーコーとジャック・デリダ)にいかなる仕方で引き継がれ、呼応しているのかを見た。(論文「来たるべき啓蒙への問い フランス現代思想と『啓蒙の弁証法』」『『啓蒙の弁証法』を読む』所収)

(4) 2023年度の研究実績は、第一に、スピノザのデカルト批判のうちに、想像力の言語という論点があることを指摘したうえで、いかにそれが哲学にとって不可避であるかということ、そこにこそ、哲学の方法論が必然的に抱え込まざるをえない倫理的決定が露呈するということを論じた。スピノザの批判は、デカルトには、哲学が制御しえない言語にたいする批判的な洞察が欠如している点を解明するものであった。デカルトの方法は、スピノザによれば、フィクションへの無反省な依存であり、想像力の言語への妥協にすぎない。本研究はこのことをデリダの講義録を参照することによって、方法の大原則が、当の方法から始めることはできないということ、それでも方法から始めようとするれば、想像力によるフィクションに訴えなければならなくなるということを示した。つまり、そのようなフィクションへの依存において働く想像力の言語に、本研究が追究しようとしているテレパシー倫理の要素を突き止めることができた(スピノザ協会招待

講演「誰がスピノザを恐れているのか 超越論哲学(デリダ)のスピノザ忌避について」。

第二に、デリダがハイデガーとフロイトの読解を通じてとりあげた「郵便」の概念のもとに「テレパシー倫理」の要点を練り上げた。日本語圏ではこの問題に最初に着手したのは、東浩紀『存在論的、郵便的』である。本研究課題では、東の近著に基づき、この概念が新たに解釈されて「郵便的不安」として提示されている点を重視し、そこに現代の管理社会にみられる生権力への抵抗を「郵便的訂正可能性」として析出した。これは、本研究課題の「テレパシー倫理」の今後の展開の萌芽に位置づけられるべきものである。(論文「郵便的訂正可能性について」)。

本研究の主要な業績に関連する成果として、研究代表者の単著『読むことのエチカ ジャック・デリダとポール・ド・マン』(青土社)へとまとめることができた。また関連して、訳書(付解説)ジャック・デリダ『メモワール』(水声社)の刊行によって、関連する問題設定をさらに展開することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 2
2. 論文標題 絶対的な単独性を救うこと ロドルフ・ガシェ『読むことのワイルド・カード ポール・ド・マンについて』を読む	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Supplements	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 13
2. 論文標題 情動の退隱 フロイトと現代ポピュリズムの問い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エクリヲ	6. 最初と最後の頁 177-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 50-1
2. 論文標題 文献紹介：マーティン・ヘグルンド『この生』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 48-18
2. 論文標題 グローバル・パンデミックにおける信と知 デリダの自己免疫論とコロナ・ピューリタニズム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 193-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 5
2. 論文標題 ジャック・デリダの「死後の生」 ポストヒューマンと不死の行方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 282-291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 136
2. 論文標題 永遠の乖離としての純粋言語 ポール・ド・マンのベンヤミン「翻訳者の使命」読解	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 181-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 120(11)
2. 論文標題 郵便的訂正可能性について 東浩紀の『存在論的、郵便的』と『訂正可能性の哲学』のあいだ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新潮	6. 最初と最後の頁 281-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎裕助	4. 巻 15
2. 論文標題 脱構築のトリセツ 脱構築入門(の彼方へ)の一步	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ゲンロン	6. 最初と最後の頁 72-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yusuke Miyazaki
2. 発表標題 Une vie, une survie: Derrida and Deleuze on the Concept of Life
3. 学会等名 7th Derrida Today Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮崎 裕助
2. 発表標題 来たるべき啓蒙への問い フーコーとデリダにおける『啓蒙の弁証法』の射程
3. 学会等名 専修大学哲学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮崎 裕助
2. 発表標題 パンデミック下の現代思想 コロナ禍以後の私たちの生の行方
3. 学会等名 専修大学人文科学研究所定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮崎 裕助
2. 発表標題 永遠の乖離としての純粹言語 ポール・ド・マンのベンヤミン「翻訳者の使命」読解
3. 学会等名 シンポジウム「翻訳者の使命 はいかに受け継がれたのか ベンヤミン「翻訳者の使命」と、20世紀フランスを中心とするその受容」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yusuke Miyazaki
2. 発表標題 Nature Without Ideas: A Question for Catherine Malabou on Before Tomorrow
3. 学会等名 Association for Deconstruccion
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 来たるべき共感の共同体 シンパシー、エンパシー、テレパシー
3. 学会等名 三田哲学会公開ワークショップ「来たるべき民主主義 デリダのデモクラシー論と友愛論を基軸に」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 反復としての革命と歴史的判断力の政治的射程
3. 学会等名 東北哲学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 著者応答：書評パネル 宮崎裕助『ジャック・デリダ 死後の生を与える』
3. 学会等名 表象文化論学会第15回研究発表集会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 ポスト・トゥルース時代における「嘘」の再変容
3. 学会等名 第2回表象文化論学会オンライン研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 アーレントの「思考」の諸問題
3. 学会等名 第9回大阪哲学ゼミナール
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 五つの質問 鈴木康則「条件への思考 ジャック・デリダ「暴力と形而上学」の読解」への問い
3. 学会等名 三田哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 誰がスピノザを恐れているのか 超越論哲学（デリダ）のスピノザ忌避について
3. 学会等名 シンポジウム「スピノザをめぐる内在／超越：デリダとドゥルーズの場合」スピノザ協会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 西田幾多郎『善の研究』第2編後半および関連テキストについて、第1回「日本哲学の脱構築」
3. 学会等名 ワークショップ「西田幾多郎『善の研究』を読む 第2編を中心に」、脱構築研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 現代民主主義の訂正可能性 『存在論的、郵便的』からみた『訂正可能性の哲学』の問題
3. 学会等名 シンポジウム「25年後の『存在論的、郵便的』から『訂正可能性の哲学』へ 東浩紀氏とのディスカッション」脱構築研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 「貝殻の奥にひそむ潮騒のように ポール・ド・マンの戦争」をめぐって
3. 学会等名 ワークショップ「ジャック・デリダ『メモワール ポール・ド・マンのために』を読む」脱構築研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮崎裕助
2. 発表標題 快原理の彼岸の彼岸にむけて
3. 学会等名 ワークショップ「Yoshiyuki Sato, Power and Resistance (Verso, 2022) 書評会」フーコー研究フォーラム(招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 上野 成利、高幣 秀知、細見 和之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 314
3. 書名 『啓蒙の弁証法』を読む	

1. 著者名 日本18世紀学会 『啓蒙思想の事典』編集委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 十川 幸司、藤山 直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 精神分析のゆくえ	

1. 著者名 ジャック・デリダ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 344
3. 書名 メモワール	

1. 著者名 ハイデガー・フォーラム 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 642
3. 書名 ハイデガー事典	

1. 著者名 西山雄二 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 いま言葉で息をするために ウイルス時代の人文知	

1. 著者名 日本アーレント研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430
3. 書名 アーレント読本	

1. 著者名 森脇透青, 西山雄二, 宮崎裕助, ダリン・テネフ, 小川歩人	4. 発行年 2023年
2. 出版社 読書人	5. 総ページ数 210
3. 書名 ジャック・デリダ「差延」を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------